Japan society of Home Economics

日本家政学会誌　Vol. 58　No. 9　553～561（2007）

平成19年度 学会賞受賞記念論文

住空間計画に関わる住生活学の研究

今　井　範　子

（奈良女子大学生活環境学部）

Study on Dwelling Science Dealing with the Planning of Living Space

Noriko IMAI

Faculty of Human Life and Environment, Nara Women's University, Nara 630-8506

Keywords: dwelling style　住様式，dwelling consciousness　住意識，dwelling life　住生活，living space　住空間，dwelling culture　住文化，floor planning　平面計画，planning of dwelling environment　住環境計画.

1. はじめに—「住み方調査」との出会い

奈良女子大学家政学部2回生のころ，住居系の学生がよく携えていた住宅専門雑誌『新住宅』に，西山夘三・京都大学教授の「日本の住まい」（後に単行本として勁草書房から出版）の連載記事があった．絵図の多いその記事を毎号楽しみにした．なかでも「住み方調査」に興味がひかれ，若い心に「なんと面白い」研究のあることかと響いた．

4回生になり，京都大学で西山教授の最初の助手をされた扇田信教授の住生活学研究室に入った．あのような調査研究をしたいと，奈良市の新興住宅地・学園前の住宅40例余を対象とし，念願の「住み方調査」を行い，『リビングルーム形式の住宅の住まい方に関する研究』という題目で卒論をまとめた．卒業研究を進める中で，扇田先生をはじめとする多くの「住み方調査」に基づく論文に，研究方法の基礎を学び，住み方の学に一層引き込まれていった．

「住み方調査」は，西山先生が戦前に編み出された調査方法であり，これによって食寝分離論を発表された．そして戦後の住居計画学において，住空間の型と生活の型の対応関係の矛盾を明らかにし，次の新しい住空間を作り出すための調査方法として，建築学の研究者によく使われていった．団らん，食事，就寝，接客などの生活行為がどの空間で行われているか，家具の配置を採取する「住み方調査」による研究は，個々の生活行為と空間とを対応させて空間のあり方を機能主義的に扱うものであった．

2. 住生活学・住様式論

『住生活学』（扇田信：朝倉書店，1978）にも述べられているように，住生活は，人間の単なる物理的行為ではなく，すぐれて文化的行動であることがその本質であり，住生活学はそのような対象として住生活を認識し，追究していく立場をとる．このことから住生活学では，「住の面に現れた生活様式の総称」[1)2)]と定義される「住様式」を，研究の主対象とし，住様式の視点から住空間の計画を考えることが特徴といえる．

大学院を修了し，奈良女子大学家政学部助手に就いた時は，高度経済成長期が終焉を迎えたころであった．明治維新以来，日本は欧米の生活様式に新しい模範を求め，採り入れる努力をしてきたが，とりわけ高度成長期を経る中で，戦後の種々の社会的変化を背景に，住様式もまた急激な変貌を遂げた．

日本のこれまでの住様式発展の中で，欧米の影響は無視できず，洋式化の進展は，日本の住様式，住空間のあり方を考える上で重要な課題であった．

住様式の近代化を目指す動きは，戦後，格段に強まったが，上述したように，明治維新，戦後と，日本の住様式の近代化は，即，洋式化を意味していたといってよい．

しかし，形のみの模倣や，その様式が成立してきた歴史的，社会的，慣習的な背景を考慮することなく，採り入れようとする傾向も色濃くあった．形のみの導入は安易であり，そうであったからこそ，急激な変貌を可能にしたのかもしれないが，それは一方で，導入過程において種々の矛盾，問題を引き起こしてきたと

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

いえ，当時の日本の住様式の発展方向が歪む一因となっていた．

さらに，伝統的に培われてきた日本の住様式を深く検討することのない，戦後の時代風潮のなかで，それらはむしろ否定的にとらえられることも多く，洋式化が当然視され，その一途を辿っていた．

日本の住様式，住空間の洋式化はどこまでも一直線に突き進むのであろうか？　また，進むべきであろうか？　このような問題意識から調査研究を始め，最初に疑問を感じたのは，洋式浴室の住宅への導入であった．それを端緒として，扇田教授のもとでの10年間の仕事を，1985年5月に，京都大学建築学科の巽和夫教授の指導の下に，『住様式からみた住宅平面に関する研究』[3]として学位論文にまとめることができた（第1章・序論，第2章・第2次大戦後からの住様式からみた住宅平面の変遷[4)~8)]，第3章・起居様式と床面様式―平面計画と洋室化―[9)]，第4章・寝床様式と主寝室[9)]，第5章・入浴様式と浴室関連空間[9)]，第6章・家事様式と家事関連空間[10)]，第7章・補論：伝統的都市住宅における住様式の変化とその動向[11)12)]，第8章・結論）．

学位論文は，日本の住様式の変容を，欧米の強い影響の下での「洋式化」の過程としてとらえ，都市住宅を対象に，その現状と動向を分析し，わが国の歴史的・文化的条件に適応した住様式の発展方向と，住宅平面計画のあり方を論じたものである．住様式における洋式化の限界を論証し，将来に向かっては，日本独自の生活文化に根ざした住様式の醸成と，和・洋両様式の併存，融合のあり方に関する指針を検討した．

この後の研究の展開と関連するので，少し長くなったが，学位論文に関わる研究経緯について述べた次第である．

3. 住生活学の立場とその独自性

住様式の視点は，住空間計画を考える上で，重要な基盤となるものであり，計画・設計の考え方を左右し，計画・設計とは不可分の関係がある．

住生活学は，住居計画学と類似の側面を有していて，生活と空間との関係を扱うことは同じであり（図1），それをもとに，新しい住空間のあり方を考察するところも似ている[13)]．しかし，住生活学ではさらに，住様式の動向やその発展過程，そして新しい空間のあり方を生活原理から捉えることを本領とする．したがって，住生活が跛行的，あるいは歪んだ発展の仕方をしていないかを，価値判断を伴いながら検討し，新しい住空間のあり方を指し示すという研究姿勢が重要であり，この点が家政学（生活科学・生活環境学）における住生活学の意義であるといえよう．

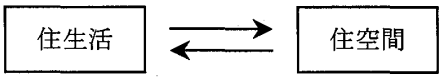


図1．住生活と住空間の相互関係

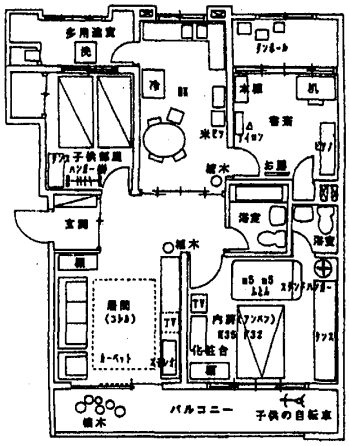
4. 韓国・中国の都市集合住宅における住様式近代化と住空間

(1) 住み方調査手法の併用

学位論文をまとめた後，おりしも，留学生を受け入れることになり，韓国，中国の都市集合住宅における住様式上の課題を取り上げていくこととなった．当時，両国は生活の近代化が進行し，伝統的な住様式が変容しつつあった．そこで，学位論文の研究方法とその手法を発展的に応用し，幾つもの興味深い住生活現象と，その変容を明らかにすることができた．また，その背後に横たわる住意識を掘り下げることによって，変容の背景と理由を把握することができた．この研究では，仮説検証型の調査であったので，質問紙による調査を企画，実施するとともに，その中から典型例を抽出して，具体的な生活様態を確認するために，住み方調査の手法を適用した（図2，図3）．統計的数値と生き生きとした生活の有り様の双方を確認することによって，検証作業をより確実なものとすることができた．それらの研究を以下に簡述する．

(2) 韓国都市集合住宅の住様式と住空間[14)~16)]

韓国の住様式の中では，伝統性，格式性が存続する



③タイプⅢ（内房公私未分離・家族中心型）の事例　ｻﾝﾌﾟﾙNO. 152【団らんの行為を内房で行っている】家族4人（夫35歳，妻32歳，長男 5歳，次男 5歳）
冬季には子供部屋が北側に位置しているため，寒いという理由から内房をベッド化しているにもかかわらず，夫婦が子供たちと同寝している．夏季には子供部屋で就寝し，季節によって子供の就寝場所に変化がある．団らんは冬季には内房を使用し，夏季にはコシルを使用しているが，今後はコシルを希望している．家族の食事は主にＤＫで行っているが，コシルで行う場合もある．接客と接客の食事はコシルで，客の宿泊は書斎を使用している．（3LDK，84.9m²）

図2．韓国集合住宅における住み方の事例[14)]―「内房の使われ方」の類型例―

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

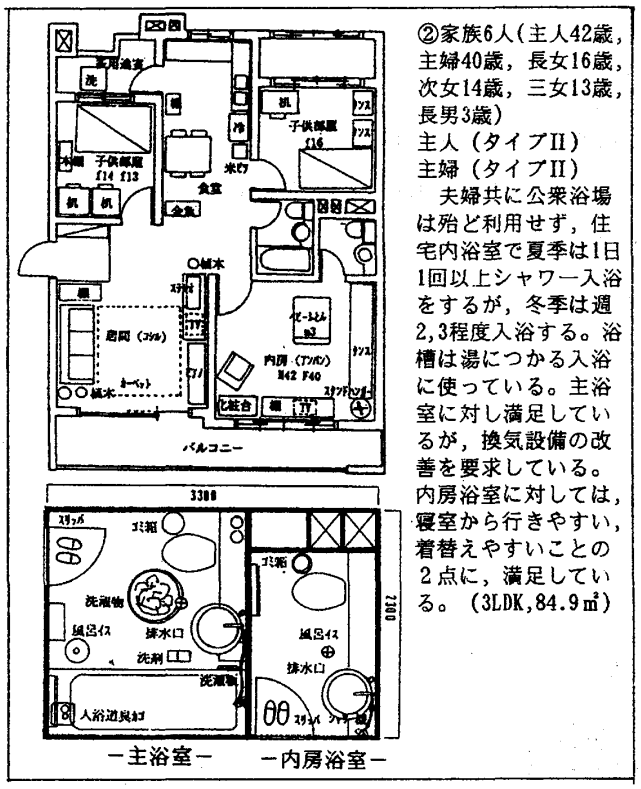


図3．韓国集合住宅における浴室空間の使われ方の事例[16]

空間として内房（アンバン）が，根強く残ってきた．しかし，ベッド化の進展は内房の私室化を促し，内房の使われ方を分析すると，内房の担っていた行事や，格式を意識した接客などの機能はコシル（リビングルーム）に移行し，格式空間としての内房利用は減少していることを検証した．日本住居の畳空間との類似，あるいは相違を比較考察することによって，住様式における，歴史的，文化的意義の重要性を確認することができた．

また，韓国の都市集合住宅（ソウル，光州）において，とりわけ変容の著しい入浴様式と入浴関連空間に着目し，韓国に適合した浴室空間のあり方を検討した．公衆浴場と住宅内浴室の双方を利用し，その利用度により幾つかの型に入浴慣習が類型化され，若い世代や大都市ソウルでは住宅内浴室に利用が移行していることや，入浴意識の諸特徴を明らかにした．

さらに，住宅内浴室の主浴室（ハジャンシル：浴槽，洗面台，便器が一室の家族用の浴室）と内房浴室（洗面台，便器，シャワー設備を備えた内房に付属する夫婦専用の浴室）について，住様式の視点から検討し，主浴室の3点一室の浴室形式は不満が多く，種々の改善要求が存在することから，その改善方策を提示した．

(3) 中国の住様式の変容と住空間[17)~19)]

中国都市集合住宅における，上下足分離の履床様式と入浴に関わる住様式の新動向に着目した．西安の集合住宅において，「上下足分離」の進展状況と，その進展をもたらしている要因や理由を明らかにし，「下足のまま」から「上下足分離」の履床様式への，画期的な住様式変化とその定着傾向を示唆した．加えて，「上下足分離」の履床様式の導入に伴う，住宅平面計画上の考慮すべき点を提言した．

主な入浴方法として，伝統的な公共浴池（公衆浴場）での入浴が持続する一方，住宅内衛生間における「シャワー式」の入浴方法の浸透がわかり，入浴に「清潔」，「疲労回復」さらに「美容」，「くつろぎ」などが求められ，目的の多様化が認められた．これらの変化に対応した入浴空間の平面計画を提案した．

韓国，中国の都市集合住宅において，近年，住様式上の変化が著しく，日本での住様式の変化と類似したことが生じていて興味深いものがあった．生活上の実質的な必要性や，生活面での意味を，居住者の住み方の実態と意識を通して確認することができた．新しく出現してくる住様式が単なる流行で無く，それは住様式を歪み無く発展させるものであることを確認し，対応する新しい空間のあり方を提案した．

以上のように，韓国と中国におけるこれらの調査研究は，学位論文における研究方法論の有効性と，住様式の視点から住空間のあり方を追究する重要性を再確認するものであった．

5．家族形態・居住形態の動向と住様式の諸課題

近年の家族形態の著しい変化がもたらす住様式上の課題を，かねてから取り上げたいと考えていた．日本社会に生じてきた家族形態，およびその居住形態の大きな変化は，これからの住様式上の重要な課題と考えたからである．

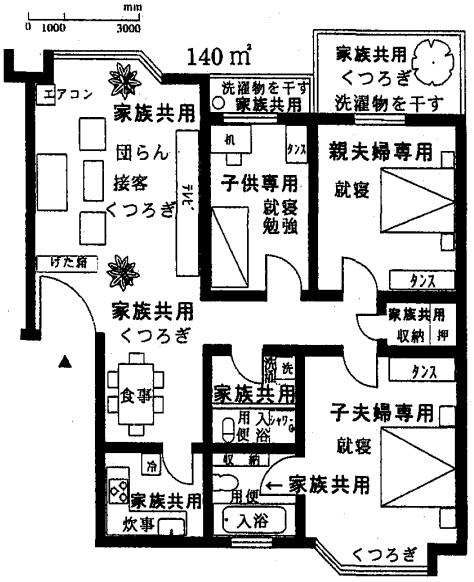
家族形態のみを見れば，家族の問題に終始するが，住空間と結びつけて住宅計画や居住形態のあり方として見ると，それは住様式の問題としてとらえることができる．家族の居住形態の動向は，住空間や住環境の計画に密接に関わるからである[20)~27)]．

(1) 世代同居に関わる住様式とその住空間[20)]

高齢期の居住形態として，三世代同居は減少してきているものの，日本では今後も一定の割合を占める家族型である．この三世代同居について，親世帯と子世帯の生活スタイル（炊事・食事・団らんの日常生活行

NII-Electronic Library Service

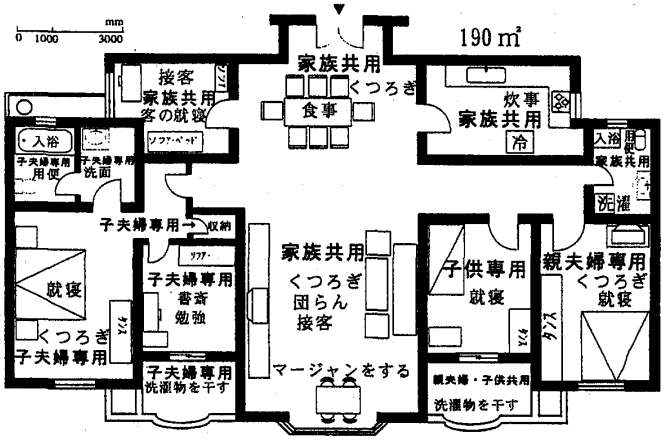
Japan society of Home Economics



事例1

家族構成：親夫婦＋子夫婦＋子供

世代で共用する方式：寝室内の衛生間の浴槽は世代間で共用として使われている．便器は子夫婦専用として使われている．



事例3

各世代の寝室を確保すると共に，書斎，客房を確保した事例

家族構成：親夫婦＋子夫婦＋子供

家族人数：5人

図4．中国集合住宅における世代同居の事例[24]

為，生活時間，楽しみごと等）と同居に対する意識を分析し，各世帯からみた同居の長所と短所を明らかにする研究である．親世帯，子世帯の生活領域の分離と融合のあり方を検討し，同居型住宅における住様式上の問題点と，平面計画上，考慮すべき点を明らかにした．とくに，団らん行為については，実際の住み方と意識においても，各世帯間の分離要求が強く，同居型住宅における団らんスペースの分離を考慮することの必要性を指摘した．

(2)　伝統的町家における家族形態・居住形態の動向からみた住様式と今後の住空間計画[21)22)]

伝統的建造物群保存地区の奈良県橿原市今井町は，人口の高齢化等を背景に，住宅の空家化や老朽化が進行し，居住環境の悪化が問題となっていた．歴史的環境の保存には次世代への居住の継承が必要であり，これまでは三世代同居という形で居住が継承されてきたが，ライフサイクルにおける高齢期の長期化に伴い，住宅規模が対応できず，子世代の別居化が強まることを解明し，隣居や近居が可能な住空間を計画，整備して，親子間の血縁による居住の継承を図ること等を提言した．

また，改修状況と改善要求から，居住が継承されるための住宅改修の動向と課題を明らかにしたが，今井町住宅を生活空間として保存するためには，内部空間に新たな機能を持たせ，設備，平面計画，デザインによる質的向上が必要不可欠であり，内部空間の改修を促すことの重要性を指摘した．

(3)　中国都市集合住宅における世代家族同居の住み方[23)24)]

成都の都市集合住宅である「商品房」における世代同居家族を調査対象とし，親世代と子世代の生活スタイルと，同居に対する意識を調査した（図4）．伝統

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

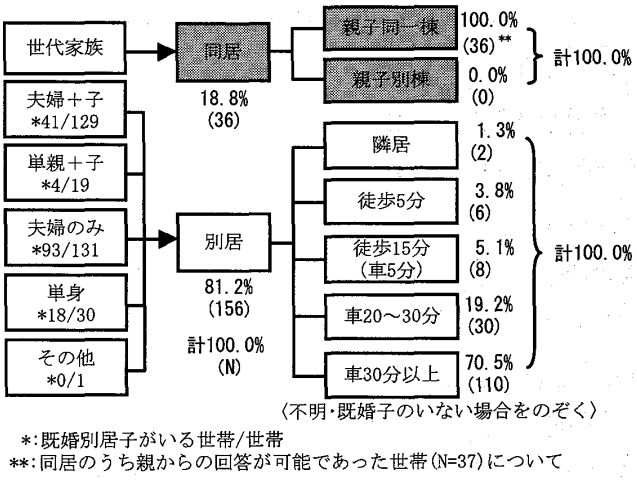


図5．遠隔郊外居住における既婚子との居住形態[27]

的な親子の共食慣習の重視が確認でき，親子の世代間の生活時間のずれ等々による生活上の問題点はあるが，同居志向は強く，また別居志向の場合でも近居志向の強いことがわかった．同居志向の存在からも，その住空間の使い方，住み方，住意識からも，世代同居家族は家族が揃って一緒に食事をするという慣習を重視し，台所，餐庁（食事室）に対する，親子の世代間の分離要求の無いことが確認された．衛生間において，便所と浴室の世代間の分離要求，さらに洗濯物に対するプライバシー意識などからは，干し場として，バルコニーの世代間の分離要求などを指摘し，平面計画上の問題とその改善計画を提案した．

(4) 親子の居住形態と畳空間[25)26)]

学位論文では，畳空間は予備室，ないし客間として残されることを明らかにし，実際そのような経緯を辿った．その研究の発展として，家族関係の変化が畳空間を変えていく状況を以下のように指摘した．

大都市圏に立地する集合住宅居住者を対象として，畳室の使われ方の現状把握を踏まえ，改まった客の減少，子供の祝い事などの家庭年中行事でのLD空間の使用，親子近住という最近の居住志向による泊まり客の減少等の生活現象を明らかにし，接客・行事空間としての畳空間の存在意義が薄らいでいることを論証した．

一方で，畳に対する愛着，部屋としての必要性，床材としての畳，起居様式と畳床などの側面から畳空間

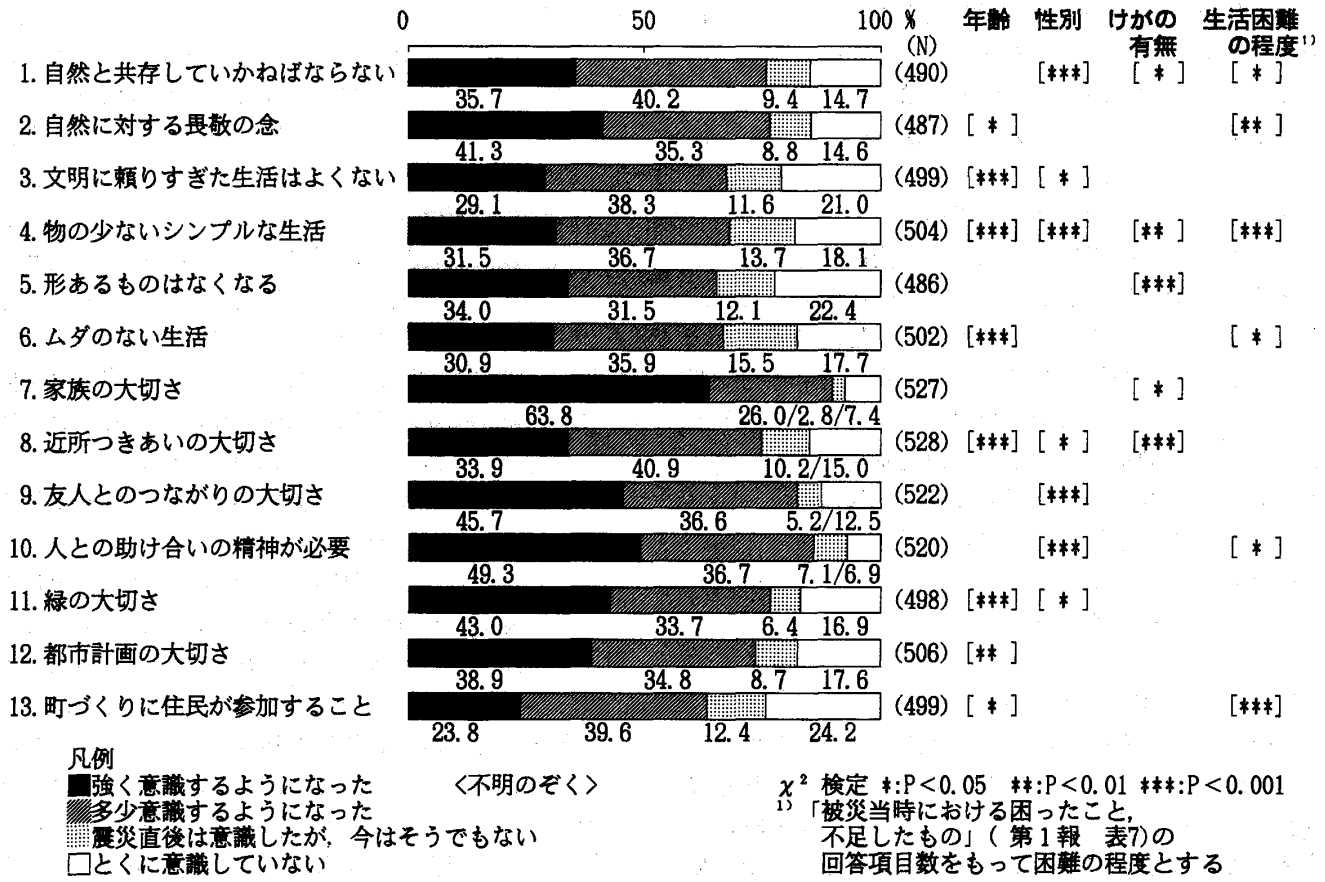


図6．阪神・淡路大震災による住生活に関わる諸意識の変化[30]

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

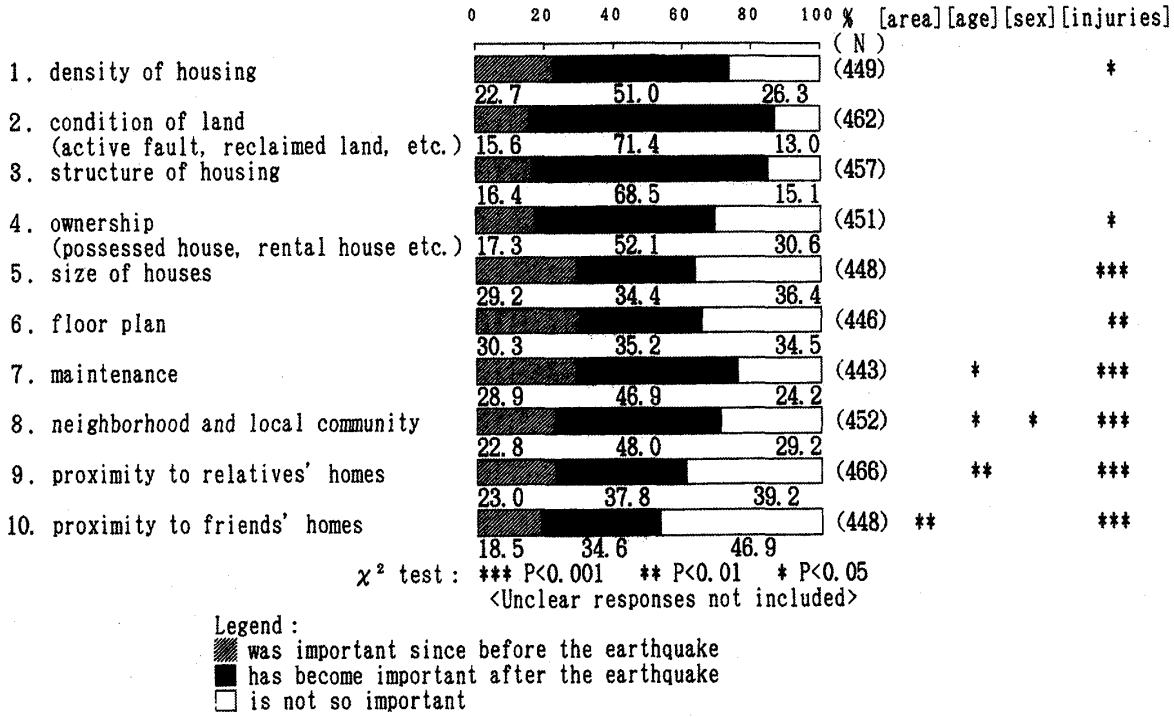


図7. Changes in preference of housing and residential area[32)]

に対する居住者評価，さらに畳空間のデザイン（伝統性と現代性）に関わる居住者意識を調査した．その結果，心の安らぎや，くつろぎなど，畳空間に精神的要素を求める傾向があり，それらを踏まえて，現代的な様相を取り入れた新しいデザインが求められている面が明らかになった．

(5) 親子の居住形態と遠隔郊外居住

都心から遠隔の郊外住宅地は，今後高齢化が進展し，入居者の流動が停滞すると，空家化の可能性があり，人口減少，さらにそのうち到来する世帯数の減少に備えて，遠隔郊外居住の持続可能性を探り，その善処策を考えていくことが喫緊の課題となりつつある．そのような問題意識から取り上げた調査研究では，図5に示すように，親子の居住形態は遠居が特徴であり，それらも含めて，遠隔郊外居住の問題点を論証した．

以上のように，家族関係の社会変化に伴う住様式研究へと力点を移していった．

6. 震災と住様式・住空間・住意識[28)~33)]

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災後，日本家政学会は，その2月の理事会において，緊急に特別委員会準備委員会を設置，平成7年度から阪神・淡路大震災調査研究特別委員会が正式に発足した．私はその委員会の委員として参加し，直ちに関西支部会員に，震災後3カ月の時点までに，学会員が生活者として，震災をどう体験し，行動したか，自由記述式のアンケート調査を実施した．そこからは生活基盤となるライフライン・インフラの脆弱さが浮き彫りにされるとともに，自然と人間，文明と人間，モノと人間，人間と人間の諸関係とそのあり方を生活視点から再考することの必要性が示された．

それらの調査結果を参考にしながら，震災が提起した住生活上の諸課題について検討することを研究課題の一つとすることとした．被災当時の生活困難を，世帯類型・住宅形式別に分析し，とくに超高層，高層階の高齢単身・夫婦のみ世帯に困難が増大したことが明らかになった．近代的居住様式の非常時における脆弱さと問題点を明らかにし，非常時の避難計画や支援方法に資する知見を得た．

また，住生活上の価値観に触れる諸意識の変化と（図6），震災後の防災視点からみた住み方の実態と住様式上の問題点を分析し，高度経済成長以後のモノと人との関係を見直し，モノの持ち方に対する意識や生活の仕方の再検討の必要性を指摘した．さらに住宅内における人的被害の状況と生活財（家具等）の被害状況の分析から，造り付け収納，納戸などの収納専用空間等，平面計画上，今後考慮すべき点を明らかにした．

つづいて，被災地域，奈良，浜松の集合住宅居住者

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

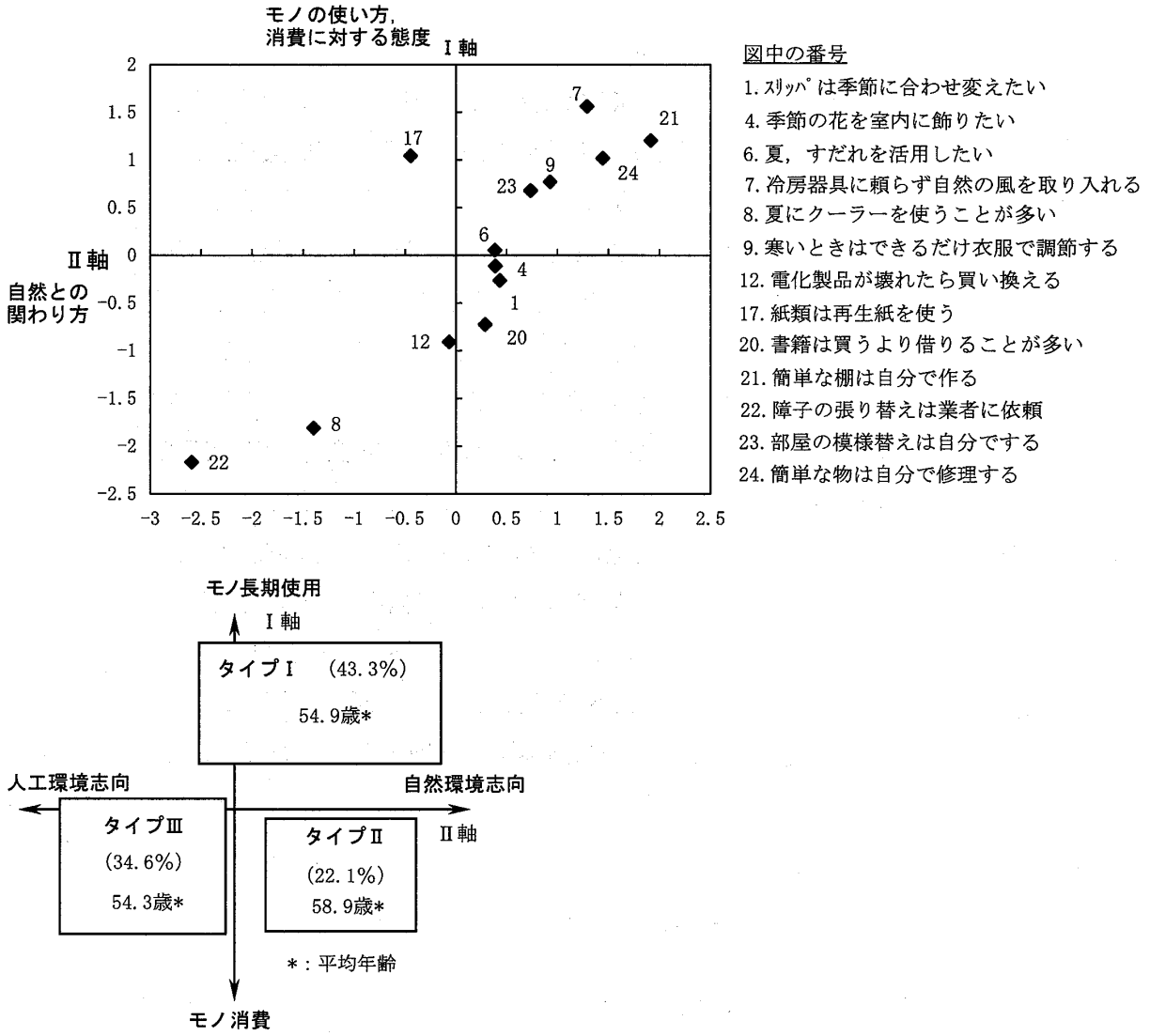


図 8．地球環境を考慮する視点からみた居住者類型[37]

を調査対象とし，土地の状態，住宅の構造，住宅の密集度，住宅の維持管理，近隣関係，地域コミュニティ，親族との近さ等，住宅選考時に重視する諸点が増加したことが明らかになり，顕著な意識変化が明らかになった（図 7）．

7. ライフスタイルと住空間計画・住環境計画[34)~37)]

住様式から少し視点を移し，個人の価値観を反映したライフスタイルの視点から住空間のあり方を考察する研究に取り組みはじめ，住生活学の研究における新たな取り組みとして，現在，この視点から研究を続けている（図 8，図 9）．

8. おわりに

以上のように，学位論文では，戦後からの「住生活の近代化」の生活目標にかかわり，その近代化と密接不離の関係にあった「洋式化」に着目したが，その後，「人口の高齢化」，「家族」，「生活の安全安心」，「地球環境問題」に関係した研究課題を扱ってきた．

世は，「生活者の視点」ばやりで，建築学分野においても唱える向きがあるが，しかしそれは，家政関連科学が持つ生活原理に基づく学体系とはいえない．家政学の本来の目的・意義に立ち返り，人の生き方，ライフスタイルを問い，そのあり方を真っ向から問うという立場を，今一度再認識し，本来の家政学（生活科学・生活環境学）の意義を見失わずに，今後の住生活学の研究をさらに深めていきたいと考えている．

本研究の受賞に際し，恩師の奈良女子大学名誉教授故扇田信先生（住生活学），京都大学名誉教授巽和夫

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

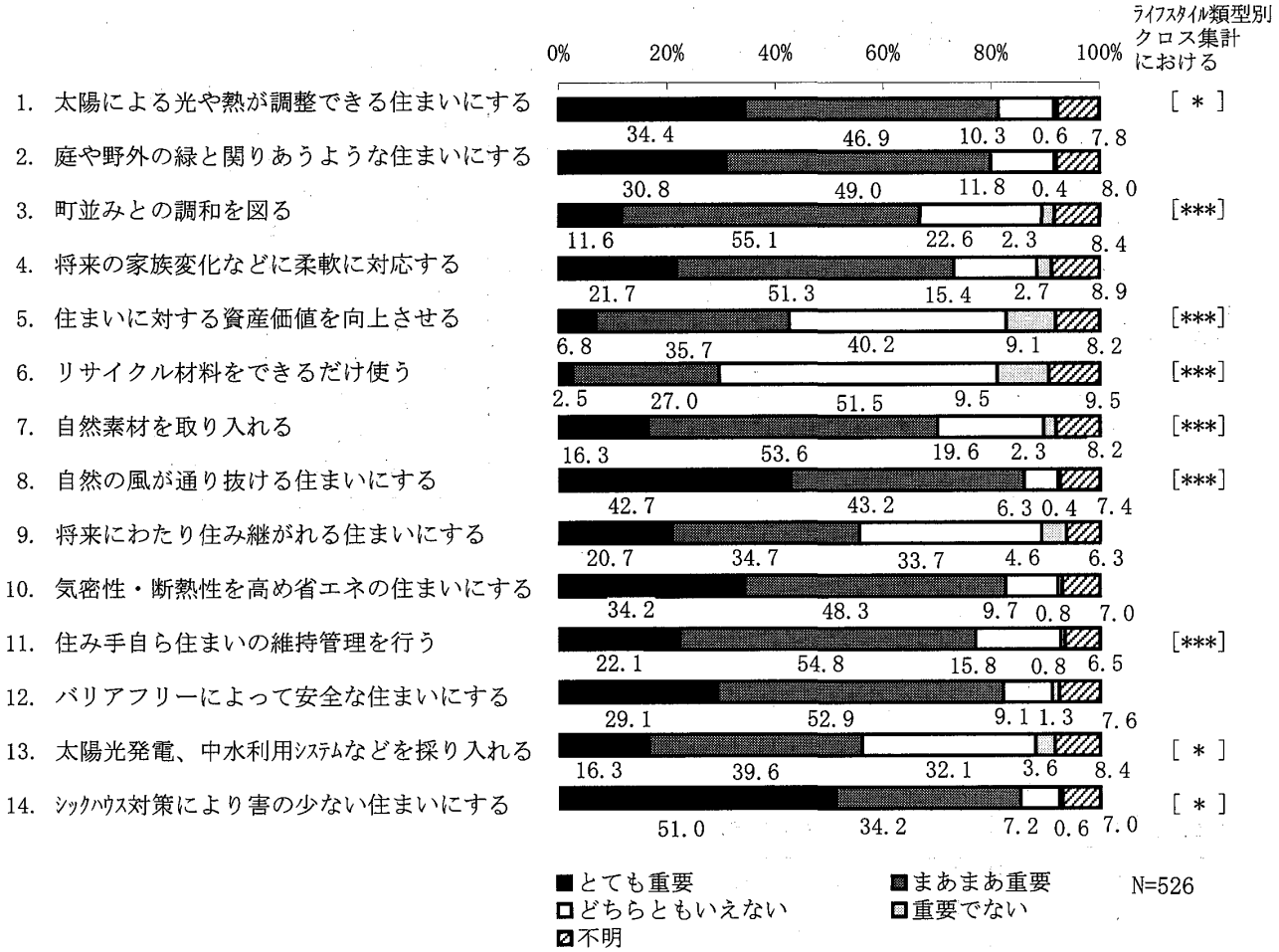


図9. リフォーム観[37]—地球環境を考慮する視点から—

先生（建築計画学）の学恩に負うところ大であったことを深謝申し上げます．

また，奈良女子大学家政学部住居学科に着任し，現在に至るまでの間，御支援をいただいた諸先輩，諸先生方に厚く御礼申し上げます．最後に，多くの御協力を惜しまれなかった「住生活学研究室」の卒業生と研究室メンバーの皆様に心より御礼申し上げます．

引 用 文 献

1) 今井範子：Ⅶ．住居，2．住生活，2.4 生活行為と住様式，『家政学事典』（日本家政学会編），804-805 (1990)
2) 今井範子：いす座，住様式，床座，洋室，洋風住宅，和室，和風住宅，『家政学用語辞典』（日本家政学会編），朝倉書店，15，204，415，418，420，445 (1993)
3) 今井範子：住様式からみた住宅平面に関する研究，京都大学博士学位論文，1-465 (1986)
4) 今井範子，扇田 信：戦後における住宅平面の洋室化状況—第2次大戦後の住宅平面の変遷（第1報）—，家政学研究，**31** (1)，31-49 (1984)
5) 今井範子，扇田 信，田中理恵：戦後における住宅平面型式の年代的推移—第2次大戦後の住宅平面の変遷（第2報）—，家政学研究，**31** (1)，50-63 (1984)
6) 今井範子：戦後における住宅の公室空間の推移—第2次世界大戦後の住宅平面の変遷（第3報）—，家政学研究，**31** (2)，38-74 (1985)
7) 今井範子：戦後における住宅の私室空間の推移—第2次大戦後の住宅平面の変遷（第4報）—，家政学研究，**31** (2)，75-92 (1985)
8) 今井範子，田中理恵：戦後における住宅の浴室関連空間・家事空間の推移—第2次大戦後の住宅平面の変遷（第5報）—，家政学研究，**32** (1)，19-45 (1985)
9) 扇田 信，今井範子，西村一朗，疋田洋子，町田玲子：第3章・住まいと生活様式のかかわり，6章 6.5 日本の土地事情と住宅，『住環境の計画・第1巻・住まいを考える』，彰国社，46-71，118-119 (1992)
10) 今井範子：住宅プランにおける家事空間の検討，奨励研究A研究代表者 科学研究費報告書，1-65 (1985)
11) 今井範子，扇田 信，四宮淑江：今井町町家住宅における改造・増築の状況とその内容—今井町町家住宅における住様式の変化とその動向（第1報）—，家政学研究，**30** (1)，26-39 (1983)

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

12) 今井範子，扇田　信，四宮淑江：今井町住宅における住様式の変化—今井町町家住宅における住様式の変化とその動向（第2報）—，家政学研究，**30**(2)，68-80 (1984)
13) 今井範子：3章・現代の住様式，3.1 住宅平面と住様式，『家政学シリーズ18　住まいと住み方』（日本家政学会編），朝倉書店，40-61 (1990)
14) 任　喜敬，今井範子：韓国の都市集合住宅における住様式とその動向—内房のベッド化の動向と住み方の変容—，日本建築学会計画系論文報告集，No.473，71-81 (1995)
15) 任　喜敬，今井範子：韓国都市集合住宅における居住者の入浴慣習の実態と入浴空間の住様式的検討　第1報—公衆浴場の利用と住宅内浴室における居住者の入浴慣習の実態—，家政誌，**46**，849-860 (1995)
16) 任　喜敬，今井範子：韓国都市集合住宅における居住者の入浴慣習の実態と入浴空間の住様式的検討（第2報）浴室関連空間の使用状況とその問題点，家政誌，**47**，477-486 (1996)
17) 趙　　萍，今井範子：中国都市集合住宅における「上下足分離」の住様式の進展とその動向，日本建築学会計画系論文集，No.550，121-128 (2001)
18) 趙　　萍，今井範子：大都市西安における公共浴池の利用と住宅内衛生間における居住者の入浴慣習の実態（第1報）中国都市集合住宅における居住者の入浴慣習の現状と入浴空間の住様式上の検討，家政誌，**53**，593-606 (2002)
19) 趙　　萍，今井範子：大都市西安における衛生間の使用状況とその問題点（第2報）中国都市集合住宅における居住者の入浴慣習の現状と入浴空間の住様式上の検討，家政誌，**53**，1125-1138 (2002)
20) 矢野真実，今井範子：三世代同居における親世帯と子世帯の住生活と意識に関する研究，家政学研究，**41**(1)，27-38 (1994)
21) 牧野　唯，今井範子：親子同居からみた居住形態の現状と居住の継承に関する調査研究—奈良県橿原市今井町の場合—，日本建築学会計画系論文集，No.510，117-124 (1998)
22) 牧野　唯，今井範子：今井町住宅における改修要求と居住の継承との関係，日本インテリア学会論文報告集，No.9，1-7 (1999)
23) 談　麗玲，今井範子：世代同居家族の生活スタイルと同居意識（第1報）中国都市集合住宅における世代同居家族の住生活と住意識に関する研究—四川省成都における—，家政誌，**54**，841-854 (2003)
24) 談　麗玲，今井範子：住様式からみた世代同居家族の住空間の問題点とそのあり方（第2報）中国都市集合住宅における世代同居家族の住生活と住意識に関する研究—四川省成都における—，家政誌，**55**，853-866 (2004)
25) 今井範子：接客・行事空間としての畳空間の検討—集合住宅における—「畳空間にかかわる住様式の動向」と「畳空間の発展方向」に関する研究　その1—大都市圏の都市住宅における“畳空間の住み方と住意識の検討”—，日本インテリア学会論文報告集，No.8，9-18 (1998)
26) 伊東理恵，今井範子：居住者意識からみた畳空間の動向—集合住宅における—「畳空間にかかわる住様式の動向」と「畳空間の発展方向」に関する研究　その2—大都市圏の都市住宅における“畳空間の住み方と住意識の検討”—，日本インテリア学会論文報告集，No.8，19-26 (1998)
27) 今井範子，伊東理恵：親子の居住形態からみた遠隔郊外居住の問題点—奈良県榛原町における—，家政誌，**57**，761-774 (2006)
28) 今井範子：阪神・淡路大震災に関する関西支部（被災地域）会員アンケート調査報告〔その1〕—自由記述式による—，家政誌，**46**，71-75 (1995)
29) 今井範子，中村久美：阪神・淡路大震災被災地域の公団住宅における住生活上の諸課題（第1報）被災当時における生活困難の実態と支援の状況，家政誌，**49**，687-698 (1998)
30) 中村久美，今井範子：阪神・淡路大震災被災地域の公団住宅における住生活上の諸課題（第2報）住生活に関わる諸意識の変化と住み方，家政誌，**49**，699-708 (1998)
31) 今井範子，中村久美：阪神・淡路大震災被災地域の公団住宅における住生活上の諸課題（第3報）モノの備えの状況とそのあり方，家政誌，**49**，1223-1232 (1998)
32) Imai, N.: Influence of the Great Hanshin-Awaji Earthquake Disaster on People's Preferences for Housing and Residential Areas—Case Study on Residents of Housing of the Housing and Urban Development Corporation in the Disaster Area—, *J. Home Econ. Jpn.*, **50**, 267-279 (1999)
33) Imai, N., and Tada, T.: Influence of the Great Hanshin-Awaji Earthquake Disaster on People's Preferences for Housing and Residential Areas—Case Study on Residents of Housing of the Housing and Urban Development Corporation in Nara and Hamamatsu—, *J. Home Econ. Jpn.*, **52**, 265-276 (2001)
34) 今井範子，猪口麻里：ライフスタイルからみた奈良県斑鳩町居住者の類型化　歴史的環境を有する町における住環境・町づくりに関する居住者意識の研究（第1報）—奈良県生駒郡斑鳩町の場合—，家政学研究，**38**(2)，136-148 (1992)
35) 牧野　唯，今井範子，居住者の生活行動からみた生活スタイル特性と住環境整備意識—奈良県橿原市今井町における—，家政誌，**50**，1171-1182 (1999)
36) 中村久美，今井範子：リビングダイニングの住生活における収納の問題，家政誌，**53**，43-56 (2002)
37) 今井範子，中村久美，伊東理恵，牧野　唯：地球環境を考慮する視点からみた居住者のライフスタイルと住意識，家政誌，**57**，45-56 (2006)

NII-Electronic Library Service